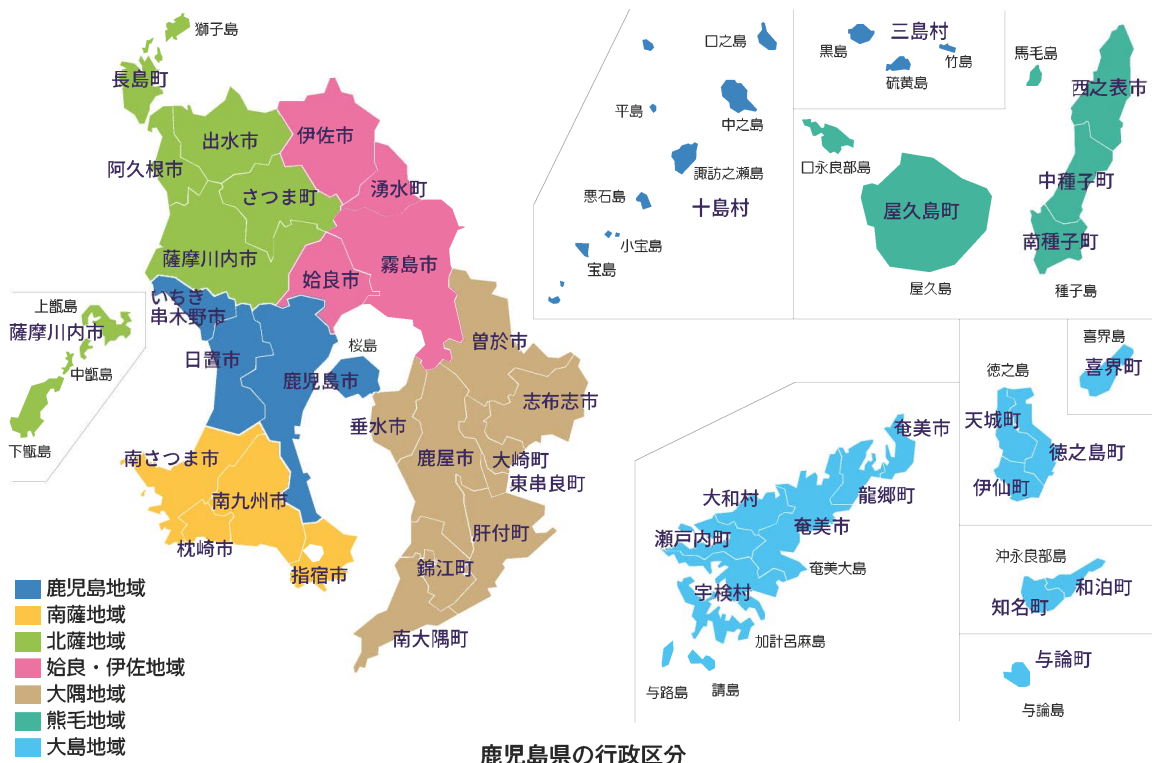


## 1 鹿児島県の概要

### (1) 県の位置等

鹿児島県は九州島の最南端に位置し、総面積は9,187km<sup>2</sup>で、2,643kmの長い海岸線を有し、18市21町4村で構成されています。最北端の長島町蜂の島から、最南端の与論町チヂ崎までは約600kmあり、気候区は温帯から亜熱帯に至り、全国の中でも平均気温が高く、温暖な気候に恵まれています。島嶼数は605で全国2位、そのうち有人島嶼数は26と全国4位であり、火山及び隆起珊瑚礁によって形成された島々が弧状に連なっています。種子島、屋久島、奄美群島をはじめとする多くの島嶼は、本県総面積の約28%と大きな割合を占めています。

方位	地名	経緯度	
最東端	志布志市志布志町後谷	東経 131 度 12 分	北緯 31 度 34 分
最西端	大島郡与論町兼母海岸	東経 128 度 23 分	北緯 27 度 02 分
最南端	大島郡与論町チヂ崎	東経 128 度 26 分	北緯 27 度 01 分
最北端	出水郡長島町蜂の島	東経 130 度 15 分	北緯 32 度 18 分



## (2) 自然の特徴

### ア 南北 600km に広がる豊かな自然

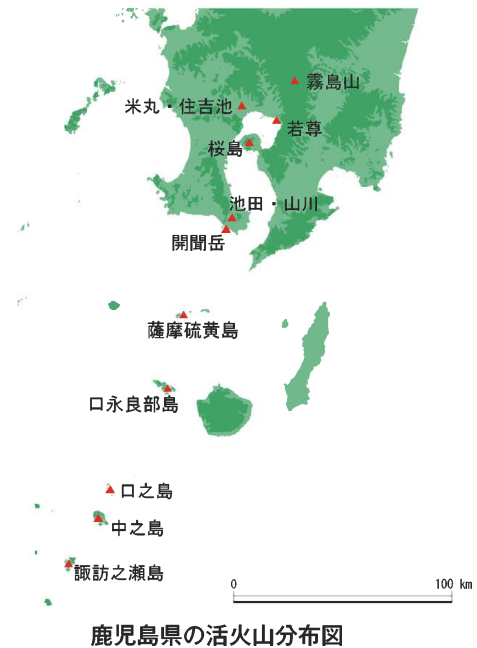
本県には、温暖な気候と海の恵みをもたらしている黒潮、変化に富んだ長い海岸線、紺碧の鹿児島湾（錦江湾）に浮かび今も火山活動が続いている桜島、源泉数全国第2位を誇る豊富な温泉等があります。また、日本で初めて国立公園に指定された霧島や鹿児島湾、日本で初めて世界自然遺産に登録された屋久島、「アマミノクロウサギ」等世界的にも貴重な動植物を有する奄美群島、島ごとの多様な環境で文化が育まれたトカラ列島等、世界でここにしかない豊かな自然環境に恵まれています。

また、県本土の中心に位置する鹿児島湾はその風光の美をもって、霧島錦江湾国立公園に指定されています。この他にも県内には、屋久島国立公園、奄美群島国立公園、そして長島の一部が含まれる雲仙天草国立公園、甌島国定公園、日南海岸国定公園があり、海岸の景観や火山地形、多様な島嶼部の地形や自然が保護されています。

このような豊かな自然環境は、農林水産業を支える生産基盤をなしており、黒豚、黒毛和牛、黒糖、黒酢、お茶、焼酎といった豊富な食品や、健康・長寿につながる豊かな食文化を育み、魅力あふれる観光資源にもなっています。

### イ 火山が生み出した地形と地質

本県には、全国に111ある活火山のうち、11の活火山があり、本土の中央部を南北に縦断する霧島火山帯に、北部の霧島からトカラ列島まで活火山が分布しています。また本県は、鬼界カルデラ、始良カルデラ、阿多カルデラ、宮崎県との境界をまたぐ加久藤カルデラの4つのカルデラを有しており、日本ジオパークにも認定されています。三島村周辺の海底カルデラである鬼界カルデラは、約7,300年前の大規模な噴火により形成されたものです。また、鹿児島湾は、火山活動によってできた大きな地溝に海水が流入してできたもので、湾奥部に始良カルデラ、湾口部には阿多カルデラが存在します。始良・阿多カルデラの大規模火山の噴出物である火砕流堆積物は、非溶結の凝灰岩と、自らの熱と圧密で硬化した溶結凝灰岩として存在し、県内の各地域に分布しています。溶結凝灰岩は、産地ごとで色調等に特徴があり、石



鹿児島県の活火山分布図

塔や建造物等の材料としても利用されています。また、南九州で使われているシラスという言葉は、火山起源の白っぽい凝灰岩の総称でしたが、現在では、約29,000年前に始良カルデラから噴出した火砕流堆積物のうち、非溶結の凝灰岩に対して使われています。

なお、大正3(1914)年には、桜島の大噴火が起こり、高さ7,000mに及ぶ大噴煙を上げ、火山灰は遠くカムチャツカ半島まで届いたといわれています。また、この時流れ出た溶岩は鳥島<sup>からすしま</sup>を埋没させ、大隅半島と桜島の間瀬戸海峡を埋め、桜島を大隅半島と陸続きにしました。

薩摩・大隅両半島部は、中生代から新生代古第三紀までの火山岩類、湖成層、海成層等で形成された基盤が、両半島の山地や北西部の紫尾山地<sup>しびさん</sup>地域の山地を形成しています。本県の地質はこの基盤の上に、火山灰に由来する黒ボク土や森林性有機質土が堆積しています。さらに、県本土の広い範囲が火砕流堆積物に覆われており、本土の約半分の地域がシラス台地となっています。

県内を流れる河川のうち、一級河川は熊本県白髪岳に水源を發し東シナ海に注ぐ川内川、大隅半島の高隈山系に水源を發し太平洋に注ぐ肝属川<sup>きもつき</sup>、及び大隅半島北部の曾於市中岳に水源を發し宮崎県都城市・宮崎市を経て太平洋に注ぐ大淀川があります。この3水系を主として、163水系463の河川があります。

## ウ 多様な自然が育んだ動植物とその保護

本県には、哺乳類49種、鳥類419種、は虫類44種、両生類26種、汽水・淡水産魚類約200種以上、昆虫類約15,000種、維管束植物約3,100種等多種多様な野生動植物が生息・生育しています。特別天然記念物の指定数は、国内最多です。

また、悪石島と小宝島の間トカラ海峡には、生物境界である渡瀬線が位置し、動植物の分布も分かれています。さらに、地殻変動により大陸との断続を繰り返したという南西諸島の地史的経緯等から南限種、北限種、固有種等学術的に価値の高い種が存在し、これらの野生動植物は、県民の生活基盤である自然環境の維持のため大切な役割を果たしており、県民の豊かな生活に欠かすことのできないものとなっています。



ルリカケス  
(国指定天然記念物)



アマミノクロウサギ  
(国指定特別天然記念物)

平成24(2012)年度から2か年にわたり県が希少野生生物調査を行った結果、県内において絶滅のおそれのある野生動植物の種が約1,400種にもものぼることが明らかになりました。国は、生物多様性保全のために生態系や野生動植物の生息地等の保護の促進、絶滅のおそれのある野生動植物の保護の強化等を求めた「生物多様性条約」に基づき、我が国の基本方針及び今後の施策の展開方向を示す「生物多様性国家戦略」を平成7(1995)年に策定し、その後、数回にわたり改訂を行っています。本県では、平成20(2008)年に制定された「生物多様性基本法」(平成20年法律第58号)第13条の規定により、鹿児島における生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本計画として「生物多様性鹿児島県戦略」を平成26(2014)年3月に策定しました。

また、野生動植物の種の保存を目的として制定された、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年法律第75号)が、希少野生動植物の保全を一層推進するため、平成25(2013)年に改正され、違法取引に対する罰則の強化等が盛り込まれました。

しかし、同法で保護の対象とされているのは、国レベルで絶滅のおそれが高い、限られた種であり、本県に生息・生育している多くの希少野生動植物を保護するには十分ではありません。このため、本県の希少野生動植物の保護を図るため、「鹿児島県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成15年鹿児島県条例第11号)により、必要な保護策を講じています。

### (3) 個性ある歴史と多彩な文化

本県は、縄文時代の「<sup>うえのほら</sup>上野原遺跡」等が示すように、1万年以上前から人々が定住生活を営んでいました。

また、地勢において、南西諸島と琉球孤列島が連続して中国大陸の東を限るよう存在しているため、大陸文化と東アジア文化の伝搬経路となり、黒潮に育まれた南方やアジアの国々との長い交流の歴史があります。

さらに、本県は、いわゆる大和文化圏と琉球文化圏との接点であったことも影響し、民俗の宝庫と言われるほど個性豊かな祭礼行事や民俗芸能が存在し、各地で多彩な生活文化が育まれています。また、経済産業大臣の指定を受けた国の伝統的工芸品である本場大島紬、川辺仏壇、薩摩焼をはじめ、県の伝統的工芸品に指定されている薩摩切子等も、鹿児島の歴史と文化によって育まれたもので、今後、守り伝えるべき技術です。

## ア 先史

本県で最も古い遺跡は、旧石器時代の「<sup>たちきり</sup>立切遺跡」(中種子町)や「<sup>よこみね</sup>横峯遺跡」(南種子町)で、約35,000年前に位置付けられます。やがて最終氷期が終わり、列島の南端という地理的特徴から他地域より比較的早い段階で温暖な環境となった鹿児島では、約15,000年前から定住化の兆しが現れます。長い氷河時代が終わり、縄文時代開始期にいち早く定住的な生活へ移行したことが、<sup>さんかくやま</sup>三角山遺跡(中種子町)や「<sup>かこいのほら</sup>柵ノ原遺跡」(南さつま市)等の発掘調査から分かってきました。



上野原遺跡 (国指定史跡)

弥生時代に、北部九州で始まった水田稲作は南薩地方へ初めに伝わったと考えられています。その後、集落の規模も大きくなり、<sup>おうじ</sup>王子遺跡や<sup>たはらぎこのうえ</sup>田原迫ノ上遺跡(いずれも鹿屋市)のような大規模な集落が各地に出現し、地域ごとにまとまりがみられるようになります。古墳時代になると北薩地方沿岸部や志布志湾岸を中心に前方後円墳や円墳が造営される一方で、大隅地方を中心とした地下式横穴墓、北薩地方を中心とした<sup>いたいしづみせつかん</sup>板石積石棺墓(地下式板石積石室墓)等、地域色の強い墓も造られます。これらの墓からは、大和政権との関係を示す副葬品も出土しており、次第に南九州にも大和政権の影響が及んできたことを示しています。

熊毛・大島地域では、サンゴ礁域に発達した個性ある文化が形成され、弥生時代から古代並行期にかけて、独特の食料採集文化が続いていたと考えられています。「<sup>ひろた</sup>広田遺跡」(南種子町)や「<sup>こみなと</sup>小湊フワガネク遺跡」(奄美市)は、サンゴ礁に生息する巻貝を素材とした貝製品が多数出土した遺跡として知られています。

## イ 古代

飛鳥時代の終わりには南西諸島に住む<sup>たね</sup>多爾人、<sup>やく</sup>掖玖人、<sup>あまみ</sup>阿麻爾人が来朝し、大和政権に朝貢する関係に入り、歴史資料にも南西諸島との交流が登場するようになります。また、隼人とよばれる人々が居住していた南九州は、8世紀に入り薩摩国、大隅国が設置され、やがて律令国家へと組み込まれていきます。隼人を用うために平安時代に建立されたといわれる「隼人塚」は、多重塔と四天王像が復元



薩摩国分寺跡 (国指定史跡)

され、地域のシンボルとして整備されています。

奈良時代には鎮護国家思想のもと、鹿児島にも国分寺・国分尼寺が建立されました。また、<sup>きょうでん</sup>京田遺跡（薩摩川内市）出土の木簡から、薩摩国内では条里制による土地管理が行われていたことが分かっています。「指宿橋牟礼川遺跡」<sup>はしむれがわ</sup>（指宿市）では、9世紀頃に噴火したと考えられる開聞岳の火山灰に覆われた建物や畑跡等が良好な状況で見つかっています。10世紀以降、班田収授は崩壊し、各地に荘園が成立します。11世紀初頭には、日向国に<sup>しまつのしょう</sup>島津荘が成立し、南九州も荘園公領制へと移行していきます。

大島地域では、9世紀頃になると農耕が開始され、食料採集社会が終わりを迎えます。

## ウ 中世

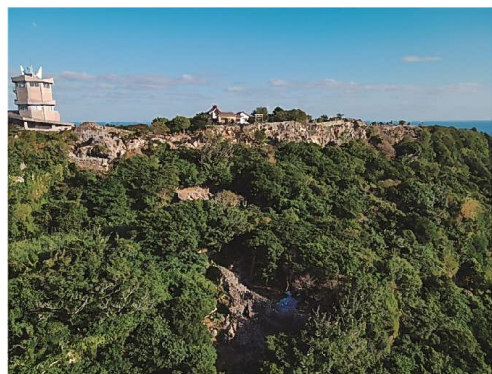
平家滅亡後の<sup>ぶんじ</sup>文治元（1185）年、<sup>これむねのただひさ</sup>惟宗忠久は島津荘の<sup>げししき</sup>下司職（荘園管理の実務を行う役職）に、翌年には地頭職に補任され、<sup>けんきゆう</sup>建久8（1197）年には薩摩・大隅の守護に任じられました。また、建久9（1198）年には、荘園の名称を名字として島津氏を名乗りました。

その後、南北朝の全国的な動乱や国人一揆等の内乱（伊集院<sup>よりひさ</sup>頼久の乱）、応仁の乱後の島津宗家の弱体化による地方豪族の反乱、15代<sup>たかひさ</sup>貴久による薩摩・大隅の制圧、16代<sup>よしひさ</sup>義久による<sup>さつぐうにち</sup>薩隅日（薩摩・大隅・日向）の三州の再統一等、南北朝・室町・戦国時代には、戦乱が多発しました。そのため、県内には多くの中世山城が築かれています。本県の中世山城は、「<sup>ちらんじょうあと</sup>知覧城跡」（南九州市）や「<sup>きよしきじょう</sup>清色城跡」（薩摩川内市）、「<sup>しぶしじょうあと</sup>志布志城跡」（志布志市）等、シラス台地縁辺部に立地し、<sup>からぼり</sup>崖を空堀の一部とする等、シラス台地特有の地形を利用した「<sup>じょうかく</sup>南九州型城郭」とも呼ばれる城が多くみられる点が特徴です。



知覧城跡（国指定史跡）

15世紀中頃から17世紀初頭まで、琉球国の統治下に置かれていた奄美群島においても、城が築かれていきます。<sup>あじ</sup>按司と呼ばれる有力者が築いた「<sup>あかき な じょうあと</sup>赤木名城跡」（奄美市）は、奄美地域屈指の規模をもち、全体の構造からみて本土の影響がみられることが注目されます。一方、「<sup>よろんじょうあと</sup>与論城跡」（与論町）は石垣が発達する琉球の影響が強く現れていることが特徴です。



与論城跡（与論町指定史跡）

16世紀には種子島への鉄砲伝来，フランシスコ・ザビエルによるキリスト教の布教等，遠くヨーロッパの技術・文化に触れることとなりました。

## エ 近世

島津氏17代義弘<sup>よしひろ</sup>は，慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで西軍に属し，徳川氏と敵対関係になりますが，島津氏は戦後，徳川氏に恭順の態度を示し，所領の三州安堵<sup>さんしゅうあんど</sup>を認めさせることに成功しました。以後，島津氏は江戸幕府の支配下に組み込まれ，本県域は宮崎県の一部とともに鹿児島藩（薩摩藩）となりました。また，豊臣秀吉の朝鮮出兵である慶長の役の際に連れてこられた朝鮮人陶工が藩の保護のもと，薩摩焼を創始し，発展させました。

慶長14（1609）年，鹿児島藩初代藩主となった18代家久<sup>いえひさ</sup>が琉球国に軍事侵攻した結果，奄美群島は琉球国の統治下から分離され，鹿児島藩の直轄地域として支配されるようになりました。その結果，琉球との交易が盛んになり，食文化においては琉球列島伝いに砂糖，さつま芋，蒸留酒製造法等を招来し，庭園文化においては屋敷構え<sup>びょうぶ</sup>に屏風岩や海泡石<sup>かいほうせき</sup>等が導入されました。また，県下の麓の集落中にみられる石敢当<sup>せつかんとう</sup>も琉球列島，南西諸島を経由して中国からもたらされたものです。

宝暦3（1753）年，鹿児島藩は幕府に濃尾平野の治水対策（宝暦治水）を命じられ，家老の平田鞠負<sup>ゆきえ</sup>が1,000人余りの藩士らを率いて美濃（岐阜県）へ向かい，工事を行いました。翌々年に工事は完了しましたが，多額の借金と多くの犠牲者を出しました。この治水工事を契機とし，岐阜県と鹿児島県との友好関係は現在も続いています。

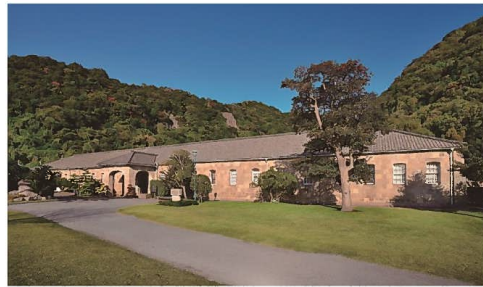
文政10（1827）年，鹿児島藩の借金は500万両に達しました。25代重豪<sup>しげひで</sup>に側近として抜擢された調所広郷<sup>ずしよひろさと</sup>は財政改革に着手し，重豪の孫にあたる斉興<sup>なりおき</sup>の代には家老となり，商人からの莫大な借金返済を元本のみ250年賦にし，奄美三島（大島・徳之島・喜界島）特産の黒砂糖の生産を強化し，琉球国との貿易を増やす等して，藩財政を立て直しました。

なお，江戸時代，鹿児島藩は外敵からの攻撃に備え，本城である鹿児島城を中心に県内各地に外城<sup>とじょう</sup>を配置し，武士団を住まわせていました。これは，外城制度と呼ばれ，鹿児島藩独自の体制でした。現在も外城の中心地である麓と呼ばれる武家屋敷群や御仮屋跡等が，県内各地に数多く残されています。これらの，外城制度による町並みや景観は現代にも受け継がれています。



石敢当  
(薩摩川内市里)

鹿児島藩は19世紀には、積極的に西洋文化を取り入れることに情熱を注ぎ、28代<sup>なりあきら</sup>齊彬は日本初の近代洋式工場群である集成館を中心に、造船、蒸気機械製造、紡績等の事業を行いました。これらは総称して、集成館事業と呼ばれています。



旧集成館機械工場（国指定重要文化財）

幕末期は、集成館事業に伴う反射炉や各種工場の建設をはじめ、英国への留学生派遣等も行われました。また、日本が初めて公式に参加することになった第2回パリ万国博覧会には、幕府とは別のパビリオンで参加し、薩摩焼等郷土の特産品を出品するとともに、薩摩琉球国勳章を各国高官に贈る等、薩摩を諸外国に強くアピールしました。こうした先進的な取組を通じ、鹿

旧鹿児島紡績所技師館  
（国指定重要文化財）

児島は、当時の日本をリードする大きな力をもつようになり、新しい国家を樹立する原動力となりました。世界文化遺産の構成資産である旧集成館等、この時期を象徴する我が国の近代化のさきがけとなった産業遺産は、今でも多く残されています。

## オ 近代

明治元（1868）年、王政復古による祭政一致を目指した新政府は、神仏分離令を出しました。これにより、廃仏毀釈の動きが藩内で断行され、数年間のうちに藩内には一つの寺院もない状況となり、寺院だけではなく境内の仁王像等も破壊されてしまいました。他地域に比べ、鹿児島藩では廃仏毀釈の影響が特に大きく、当時の寺院がほとんど残っていないのが現状です。

新しい明治政府は日本の古い社会を改め、近代的な統一国家づくりを推し進めますが、この政府の中で西郷隆盛や大久保利通といった鹿児島の優秀な人材が、国政で責任のある役割を果たすようになりました。

西郷隆盛は、当時、鎖国政策をとっていた朝鮮への対応についての考え方の違いから中央政府を去り下野しました。彼を慕い多くの若者が帰ってきたため、西郷は彼らを教育するための私学校を造りました。その頃、鹿児島では独自の県政が行われ、他県との歩調がそろわなくなっており、政



城山（国指定天然記念物及び史跡）



府は様々な施策をとりました。この政府のやり方に不満をもった私学校生徒は、明治10（1877）年1月末、政府の火薬庫を襲いました。ここに西南戦争が始まり、戦場は熊本・宮崎へと広がりましたが、西郷軍は政府軍におされて鹿児島市の城山に退き、9月24日に西郷らが自刃し、戦いは終わりました。

その後も鹿児島は、<sup>くろだきよたか</sup>黒田清隆、<sup>まつかたまさよし</sup>松方正義、<sup>やまもとこんべ</sup>山本権兵衛の総理大臣をはじめとする政治家や、<sup>とうごうへいはちろう</sup>東郷平八郎らの軍人、<sup>かわさきしやうぞう</sup>川崎正蔵や<sup>こだいともあつ</sup>五代友厚らの経済人、画家の<sup>くろだせいき</sup>黒田清輝らの文化人等多くの人材を輩出してきました。さらに、このような人材によって構成されたネットワークが、新たな人材の輩出にもつながりました。

大正3（1914）年には、本県の歴史上でも甚大な自然災害である桜島の大噴火が発生し、降灰により集落が埋没する等、人々の生活は大きな被害を受けました。腹五社神社の「噴火により埋没した鳥居、門柱」（鹿児島市）は、噴火の規模を現在に伝える貴重な資料です。

昭和16（1941）年12月8日に始まった太平洋戦争は、太平洋や中国大陸を含めて広い地域に及び、本県は本土最南端にあるため、南方への攻撃や防衛に備えて飛行場が次々に建設されました。

昭和20（1945）年になると、県本土へのアメリカ軍による空襲が開始され、特に鹿児島市は大空襲を受け、市内は焼け野原となりました。

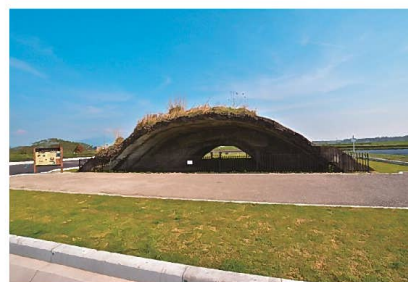
戦争が末期になると、鹿児島県は本土防衛の最前線となり、鹿屋、串良、国分、出水、知覧、<sup>ばんせい</sup>万世の各飛行場から、連日、特攻機が南の空へと飛び立ちました。現在、鹿屋、串良、国分に特攻隊戦没者の慰霊碑や慰霊塔、出水には雲の墓標、知覧には特攻平和観音堂が、平和への願いを込めて建てられており、その他にも戦争関連の遺跡が県内各地に残されています。

## カ 現代

太平洋戦争後の昭和21（1946）年2月、連合国軍総司令部の宣言により、薩南諸島のうち北緯30度以南はアメリカ軍の軍政下に置かれました。下七島（トカラ列島）も



噴火により埋没した鳥居、門柱  
（県指定天然記念物）



川東掩体壕（鹿屋市）



雲の墓標（出水市）

上三島（現三島村）と分断されてアメリカ軍の軍政下に置かれていましたが、同じように軍政下に置かれた奄美群島と提携しながら、日本本土復帰のための運動を展開しました。

その後、昭和26（1951）年、連合軍総司令部の覚書によって下七島の日本への返還が決定し、昭和27（1952）年2月10日に復帰が実現しました。同時に旧上三島である三島村と分村し、新しく十島村として発足しました。

奄美群島では、<sup>いづみほうろう</sup>泉芳朗らが中心となって昭和26（1951）年の名瀬市民総決起大会をはじめとする各市町村での日本本土復帰運動が展開され、郡民悲願の日本復帰が昭和28（1953）年12月25日に実現しました。

#### （4） 南の風土に培われた資質に富んだ人材

桜島と鹿児島湾をはじめ、県内各地の多様な自然や地形は、県民一人一人の心象風景として、生活の一部となっています。また、南に開かれた地理的環境や世界と接する中で培われた明朗かつ達で進取の気性に富んだ県民性、南国特有の開放的で明るい気質は、国内外での交流を拡大する上で有利な点となっています。

本県は、西郷隆盛や大久保利通に代表されるように、近代国家・日本の形成に大きく寄与した先人たちを数多く輩出しました。また、産業・経済・学術等様々な分野でも多くの優秀な人材を輩出しています。今なお、このような幕末の混乱期に未来を切り拓いた若者を育てた教育的風土や、地域全体で子どもたちを育てるといった伝統的な地域の教育力は継承されています。

#### （5） 優しく温もりのある地域社会

本県は、子どもや高齢者を対象としたボランティア活動を行う人の割合が全国の中で上位であったり、地域づくり等社会的な課題に住民が自発的・自立的に取り組むNPO法人数が、全国上位と高い水準にあったりする等、地域で支え合う仕組みが残っています。

このような中で、多様な主体が県内各地域において、子育て世代の交流の場の提供や育児相談、放課後児童クラブの運営、都市・農村間の交流による過疎・高齢化地域の再生、河川・道路等の美化活動、障害者の自立支援等、様々な地域課題の解決に向けた取組を進めています。

#### （6） 鹿児島が誇る遺産群

本県には、南北600kmに及ぶ広大な県域の中に、美しい自然環境が織りなす四季折々の景観、特色ある島々、奥深い歴史を感じさせる名所、良質で豊かな温泉等、魅力ある資源が豊富にあります。

特に、世界的に価値を認められた資源が豊富で、世界自然遺産「屋久島」,「奄美大島, 徳之島, 沖縄島北部及び西表島」, 世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼, 造船, 石炭産業」と、国内最多に並ぶ3つの世界遺産を有しています。また、ユネスコ無形文化遺産「来訪神：仮面・仮装の神々」や日本遺産「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」も認定されています。さらに、地質学的な重要性や景観と生活・文化とが一体となって評価された、3地域の日本ジオパークも認定されています。

## ア 世界自然遺産

### 屋久島

屋久島は、特異な生態系と優れた自然美を有していることを評価され、平成5（1993）年12月に日本で最初の世界自然遺産として登録されました。国立公園や森林生態系保護地域の一部のほか、原生自然環境保全地域と国の特別天然記念物「屋久島スギ原始林」の全部が重複しており、海岸線近くの亜熱帯的な要素を含む照葉樹林帯から、山岳部のスギ林帯、ヤクシマダケ草原帯までを含む、島の全面積の約2割に相当する範囲が世界自然遺産に含まれています。



屋久島スギ原始林  
(国指定特別天然記念物)

### 奄美大島, 徳之島, 沖縄島北部及び西表島

奄美大島及び徳之島は、国際的にも希少な固有種が多く生息・生育する生物多様性保全上重要な地域であることが評価され、沖縄の2つの地域とともに、令和3（2021）年7月に世界自然遺産に登録されました。

奄美群島は、九州本土の南に点在するトカラ列島と沖縄諸島の間につながる奄美大島, 加計呂麻島, 請島, 与路島, 喜界島, 徳之島, 沖永良部島, 与論島の8つの有人島と複数の無人島からなる島々で、亜熱帯の豊かな森や美しいサンゴ礁等が多くの人々を魅了しています。

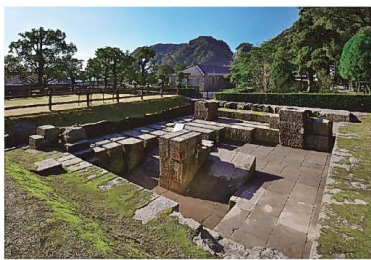


神屋・湯湾岳 (国指定天然記念物)

## イ 世界文化遺産

### 明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業

幕末から明治期にかけ、日本がわずか50年余りの短期間に重工業分野（製鉄・製鋼、造船、石炭産業）を急速に産業化させた道程を証言する産業遺産群であり、世界文化遺産として平成27（2015）年7月に登録されました。九州・山口を中心とする8県11市に分布する23の資産により構成されています。このうち、鹿児島県には「旧集成館」、「寺山炭窯跡」及び「関吉の疎水溝」の3つの構成資産があり、いずれも幕末に薩摩藩が近代化に取り組んだ集成館事業に関連するものです。



旧集成館（国指定史跡）



寺山炭窯跡（国指定史跡）



関吉の疎水溝（国指定史跡）

## ウ ユネスコ無形文化遺産

### 来訪神：仮面・仮装の神々

仮面・仮装をまとった「来訪神」が、正月などに家々を訪れ、新たな年を迎えるに当たって怠け者を戒め、人々に幸福をもたらす年中行事が登録されたもので、平成21（2009）年に「甕島のトシドン」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。その後、秋田県の男鹿のナマハゲ等、来訪神に関連する民俗文化財の拡張登録の希望を受け、これらを「来訪神：仮面・仮装の神々」とグループ化して登録に向けた取組を進めることとなりました。その結果、「甕島のトシドン」に加え、「薩摩硫黄島のメンドン」（三島村）、「悪石島のボゼ」（十島村）を含む8県10市町村の構成資産により、平成30（2018）年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。



薩摩硫黄島のメンドン



悪石島のボゼ



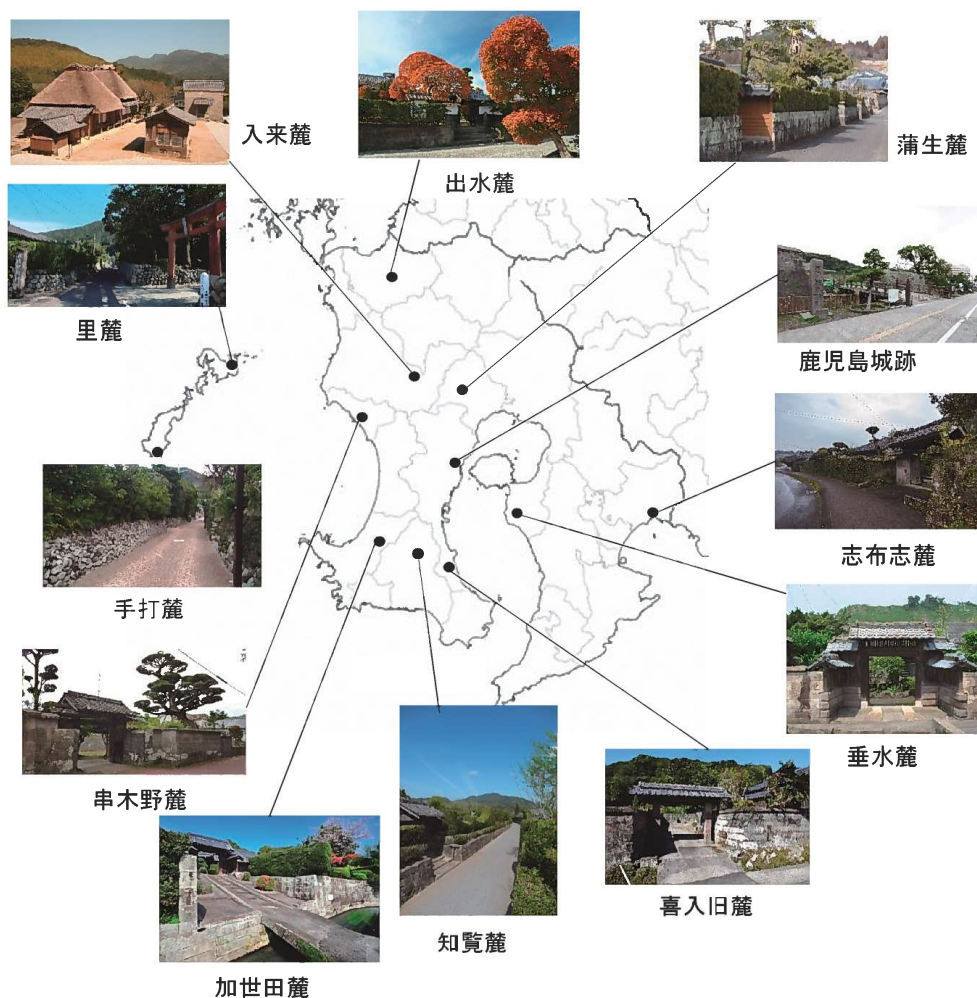
甕島のトシドン

## 工 日本遺産

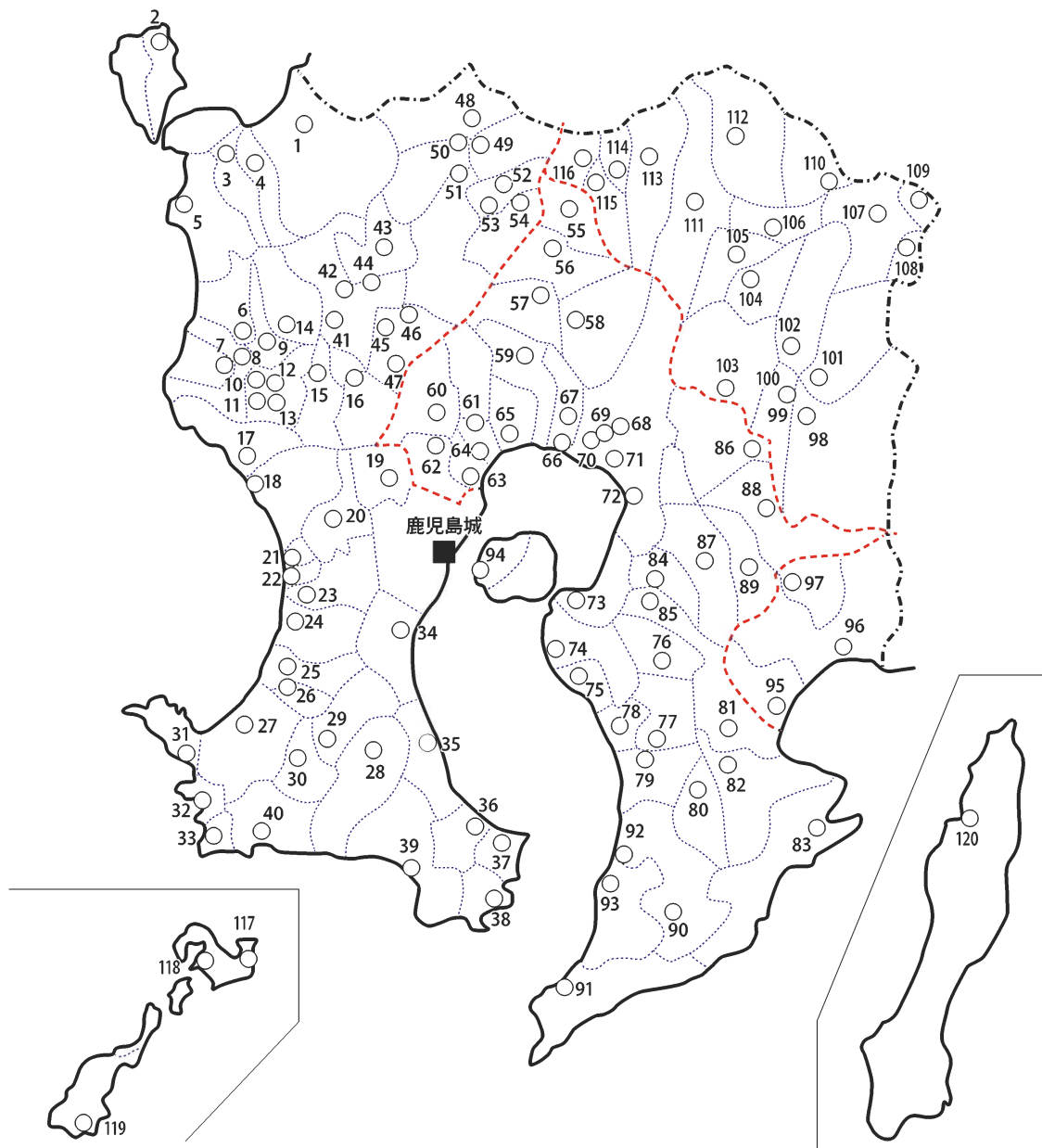
### 薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～

江戸時代、薩摩藩は鹿児島城を本城として、藩内各地を外城と呼ばれる113の行政単位に分割し、治めていました。いわゆる外城制度と呼ばれるこの体制をテーマとした「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」が、令和元（2019）年、日本遺産に認定されました。

薩摩藩の各地には多くの麓が存在し、今もその痕跡を留める場所が各地にあります。この日本遺産はそれらのうち、本城である鹿児島城跡（「鶴丸城跡」）と11の麓を中心に、1県9市（鹿児島市、出水市、垂水市、薩摩川内市、いちき串木野市、南さつま市、志布志市、南九州市、始良市）に分布する、麓と関連する合計95の文化財により構成されています。



日本遺産「薩摩の武士が生きた町」を構成する主な麓等



1 出水	19 郡山	38 山川	55 吉松	74 垂水	93 根占	110 綾
2 長島	20 伊集院	39 穎娃	56 栗野	75 新城隈	94 桜島	111 小林
3 野田	21 日置	40 枕崎	57 横川	76 高屋	<b>日向国</b>	112 須木
4 高尾野	22 吉利	41 山之崎	58 牧園	77 鹿岡	95 大崎	113 飯野
5 阿久根	23 永作	42 宮田	59 溝生	78 花良	96 志布志	114 加久藤
6 高城	24 伊布	43 鶴田	60 蒲生	79 大始	97 松山	115 馬関田
7 高江	25 田多	44 佐志	61 山田	80 吾平	98 勝岡	116 吉田
8 水引	26 阿多	45 大黒	62 吉田	81 串良	99 都元	<b>甌島</b>
9 中郷	27 加世	46 蘭牟	63 重富	82 高浦	100 郡元	117 里
10 平佐	28 知覽	47 山野	64 帖佐	83 内之	101 山之口	118 中甌
11 隈之城	29 川辺	48 山口	65 加治木	84 市成	102 山之城	119 手打
12 山田	30 山田	49 羽口	66 西国分	85 百引	103 高部	<b>種子島</b>
13 山次	31 秋目	50 大月	67 日当	86 財部	104 庄崎	120 西之表
14 東郷	32 久津	51 曾木	68 曾於	87 恒吉	105 高原	
15 樋脇	33 坊山	<b>大隅国</b>	69 清水	88 末吉	106 野尻	
16 入来	34 谷山	52 菱刈	70 国分	89 岩川	107 高岡	
17 串木	35 喜和	53 本城	71 敷根	90 田代	108 榎佐	
18 市来	37 指宿	54 湯之尾	72 福山	91 佐多	109 高倉	
			73 牛根	92 大根占		

麓の位置図  
(揚村固氏提供資料に基づく)

## オ 日本ジオパーク

### 桜島・錦江湾ジオパーク

「火山と人と自然のつながり」をテーマに、地形・地質、自然、海、産業、歴史・文化、人という6つの要素がつながるストーリーを特色として平成25(2013)年に認定されました。また、令和3(2021)年にはエリアが鹿児島市、始良市、垂水市へ拡大されました。



(写真提供：鹿児島市)

### 霧島ジオパーク

宮崎県と鹿児島県にまたがる霧島山を中心としたエリアに育まれた歴史と文化や、標高の高い山や火山活動によって育まれた植物の多様性が評価され、平成22(2010)年に認定されました。



(写真提供：霧島ジオパーク推進連絡協議会)

### 三島村・鬼界カルデラジオパーク

竹島・黒島・硫黄島の横並びの3島が全く違う表情を見せる、数少ない離島のジオパークであり、平成27(2015)年9月に認定されました。自然環境の保全とともに、観光への活用も期待されています。



硫黄岳  
(写真提供：三島村役場)